

発行：GDM 英語教授法研究会

---

### 新世紀のGDM/BASIC

学習の仕方を学習する

片 桐 ユズル

(京都精華大学)

ついに地球の資源は限られているということが、だれにとっても実感をもって明白になってきた。ベーシックの限定された語彙と組織はこの時代にふさわしい。

大きくなるのは良いことだ、それが進歩のしるしだ、と旧世紀まで多数のひとが思ってきた。だから GDM で最初は感激したひとも、もっと表現方法のたくさんある「ひろい」世界へ出たくなったり、なんか自分自身の「進歩」が感じられなくなったり、もう「全部」知ってしまったから勉強はこれ以上しなくてもよい、という気分は研究会を不活発にさせる原因のひとつだろう。

「爆発的」な発展というような言い方があるが、この“explosion”に対して、すでに 1960 年代にマクルーハンが“inpllosion”の時代にこれから入っていく、といった。“Ex-plosion”が外に向かって爆発するのに対して、“inpllosion”は外側はそのままだが内に向かって一挙にひび割れが何倍増にも走るとか、そうイメージなのだろう。“Inpllosion”はそれを読んだ 1970 年当時には実感することが難しかったが、いまは GDM/BASIC のメンバーどうしの交流をおもってみても、新幹線や高速バスやマイカーのような交通機関のみならず、電話/ファックスに加えて、E-mail のやりとりによって、コミュニケーションの網目が密になり、あたまのなかみの共有化が一挙に

---

目次	新世紀の GDM/BASIC .....	片桐ユズル	1
	学習の仕方を学習する		
	闘い終わり日が暮れて 今日夕べに明日を夢見る .....	此枝 洋子	7
	短大 GDM クラス学生との歩み		
	高校における GDM を生徒はどう見ているか .....	中山 滋樹	13
	〈アンケートから〉		
	GDM ビデオ全リスト .....		16
	活動報告 .....		17

---

すすんだことが感じられる。Inplosion をどう訳したらよいかわからなかったが、さいきん「内破」ということばを見かけた。

ベーシックは外枠は決まっているが、じつは使うひとの頭のなかで内破をおこさせるのだ。ベーシックはそれ自体で完成された組織でありながら小規模であるから、ことばのはたらきを観察するのに絶好の実験室である、トリチャーズが書いていたのを昔どこかで読んで、そのときは意味がわからないながら、気になっていた。そこからおもいだされることは、動物行動学者のコンラート・ローレンツが生態系の観察をするのにアクアリウムをすすめていた<sup>1)</sup>。

それはほとんど金がかからず、しかもじつに驚異にみちたものである。ひとにぎりのきれいな砂をガラス鉢の底にしき、そこらの水草の茎を二、三本さす。そして数リットルの水道の水を注意ぶかく流しこみ、水鉢ごと日のあたる窓ぎわに出して数日おく。水がきれいに澄み、水草が成長をはじめたら、小さな魚をなん匹か入れる。これでアクアリウムはできあがりだ。...

アクアリウムは一つの世界である。なぜならそこでは、自然の池や湖とおなじく、いや結局はこの全地球上におけるのとおなじく、動物と植物が一つの生物学的な平衡のもとで生活しているからである。植物は動物が吐きだす炭酸ガスを利用し、かわりに酸素を吐きだしている。...

リチャーズがベーシックを実験室にたとえた意味がこのごろになってわかるようになってきた: たとえば、室勝、後藤寛、相沢佳子などのしごとは、英語を母語としないひとたちが、ベーシックによって、英語を説き明かしている。

あるいは GDM で教えつづけているひとたちには学習の心理や認知のプロセスについて多くの発見があり、たとえばわたしは E P の認知的段階づけに気づいたりした<sup>2)</sup>。リチャーズはハーバード大学にいたとき自分の考えを説明するのに、ジェローム・ブルーナーの理論をつかった。当時ブルーナーは学習心理学と呼ばれていたもので、わたしはあまり興味をもたなかったが、そのなかみは今風にいえば認知心理学だったことが、わたしには 1990 年以後になってわかってきた。なぜ「学習心理学」がきらいだったかという、「学習」の意味をあまりにも狭くとり、学習についての伝統的態度について無批判であった。伝統的学習観の外に出て、学習を見なおす「メタ学習観」が必要だとわたしはおもっていた。伝統的学習観のなかから見るかぎり GDM はなっとくのいかないものであった。

## 私は英語のために勉強はしない ただ聞き流すだけ！

### 発音練習・テキスト不要

という高速英語学習法「スピードラーニング」の新聞 1 ページ大の広告を見たことがあるでしょう (たとえば朝日新聞、2001 年 4 月 2 日)。それがうまくいくのは、いわゆる「勉強」ではない仕方では英語が入ってくる仕掛けになっている。まず「発音練習・テキスト不要」とあり、開発者の大谷登のことばによれば

英会話学校、テレビやラジオ講座、通信教育など、英会話に関するありとあらゆることにチャ

レンジしましたが、一つ試しては挫折、また試しては挫折の繰り返し。そこで、飽きっぽく怠け者の自分でも続けられる教材。勉強をしている感覚がないのに英語をマスターできる方法はないかと考えたのです。自分は学校のように教科書を使っての勉強では長続きせず挫折してしまう。...そして思い付いたのが、ただ英語を聞くだけですむように、英語の後に日本語の訳を入れたテープだったのです。

そしてそのようなテープを自作し「とにかく英語の勉強は一切しない。これで覚えられなくても元々だと考えました。おかげで英語の勉強のための時間が必要なくなりました。」

じつはこのひとは自分で言語材料をさがし、訳を入れてテープを自作するという手間をかけているが、これは「勉強」ではなく、彼が嫌だったのは「勉強＝覚える」ということだったようだ。いままでの「学習」方法についての猛烈な反発があり、彼はロザノフ博士の高速学習法に触れる。「従来の学習法では緊張することと反復練習をすることを基本にしているのに対し」ロザノフ流は音楽を聞かせるなどリラックスさせて、意識下にはいつてくるようにする。

「何かを始めるときは誰も意気込んでしましますが、肩に力が入った状態では、長続きしません。英語も同じで、...」

古い「学習心理学」の実験方法はたいてい、ノンセンスな音節や図形を記憶させて、その数を計ったりした。しかし意識下もふくめて学習者の学習に対する気持ち全体を視野に入れなくてはならないことがわかってきた。たとえば「ストラテジー」ということばが登場するようになってきた<sup>3)</sup>。あるいは、Ellen J. Langer, *The Power of Mindful Learning* という本では伝統的学習観の7つの迷信を指摘している。たしかにそのような迷信をもつひとにとってGDMはなつとくのいかないものであるにちがいない<sup>4)</sup>。

1. 基礎は第二の天性になるまで習わなくてはならない。
2. 注意を払うということは一時に一つのことに集中することだ。
3. 満足を先のばしすることが重要だ。
4. 丸暗記は教育にとって必要である。
5. 忘れることは問題である。
6. 知性は「外側の事実」を知ることだ。
7. 答えは正答か誤答のどちらかである。

いままでの学習観について、これではだめだという反省がいろいろ出ている。たとえば78歳で亡くなった宇宙物理学者の小田稔さんは、生前、小学校で話しをしたときのことを語った(朝日新聞、2001年3月30日「天声人語」)：

いちばん反応するのは一、二年生。目をきらきらさせて、風圧を感じます。高学年ほどはにかむようになる。教えることが子どもをだめにするんじゃないか。僕は学問の中身を教えるのじゃなく、学問っておもしろいよということを伝えたい。

中身よりも、態度が問題だというひとたちのおちいりがちな点は、面白さについてその感激を語り、学習についての好ましい態度はかくかくしかじかであると言って聞かせることに終わってしまいがちだ。あるいは英語は面白いよ、という印象をあたえることが、いつのまにか英語教育の目的になりかわっている。英語を小学校に導入した成果について

## 英語は楽しく

### 基本構文の暗記より国際派」育成が狙い

というような見出しがある（朝日新聞、2001年4月2日）。ここで忘れられているのは、学習の仕方とか、なかみについての態度とかが変わるのは、実際にその材料を扱うことを通してのみ可能だということだ。

なかみと方法についての混乱はいくらでも例をあげることができる：

信州大の渡辺時夫教授（英語教育学）は、日本の英語教育の欠点は、英語で考えたり話したりする授業が行われず、基本構文を覚えることに重点が置かれてきた点にあると指摘する。「聞く力の土台ができてなければ、話す力は伸びない。教科書の例文をひっくり返して読むだけでは応用力もつかない」（朝日新聞、同上）

新指導要領では、特有の表現が使われる「買い物」「あいさつ」「電話での応答」など10の場面と、「説明」「報告」「賛成」など17の言語の働きが示された。

これらの例示に沿い、レストランでメニューを持って来てもらったり、バスの車内で運賃を尋ねたりするなど日常の実践的な表現をイラスト付きで紹介。各社とも英語で表現することへの親しみを持たせる工夫をこらした。...

一方、英語教育に対する基本的な考えによって、内容に差が出た部分もある。

以前から「聞く・話す」を重視する社では、本文の大半に対話形式を採用し、その分量が7割を占めた。会話の基礎になる文法や文形の学習を重視する社では、本文に長めの伝記や叙述文を残した。（朝日新聞2001年4月4日）

ひとつの混乱は、言語現象の表層の不規則性に目をうばわれて、もうすこし深い層における規則的な文型に気づかず、会話と書きことばをまったく異なったものと思こんでいる。

もう一点はコンピューターのプログラミングということを通して、脳のはたらきとの類似がうかびあがってきた。そのため「認知」とか「学習」とかが、かなり一般的なキーワードとなってきた。なかみよりは、その処理の仕方に関心が向いて来た。これは勉強についての固定観念についての反省として評価できるが、それが極端に走ると唯脳主義というか、すべては脳のなかで決まるから、脳のなかで良いことをすれば、それだけでいい、と思うような傾向もふえてきた。つまり良いプログラミングさえしておけばいい、という考え方だ。しかし脳の中のかのことは外からのシグキによって起こるし、一挙に良いプログラムが出来上がるはずはなくて、現場で実際に使ってみてのフィードバックをとおして、プログラムはだんだんに改良されていくものだ。

ロボットにサッカー試合などをさせる場合に、ロボットの設計のしかたに二通りあって、たいていのロボットは、あらかじめ戦略的な動きを人がコンピューターにプログラムしておく。

それに対して、自分でサッカーを学習するようにロボットを設計しておく研究者がいる。コンピューターによる人工知能 (AI) の研究をすすめていくうちに浅田稔・大阪大学教授が考えるようになったことは「コンピューターにロボットという『肉体』を与え、現実の世の中を体験させ、学習させること」の重要性だった。(朝日新聞, 2001年3月9日夕刊)

AIに「机」を理解させたい時、プログラムで「机」とは四角くて、木や鉄でできている」と教え込むこともできる。しかし、これは言葉と言葉を結びつけただけだ。

人間は机に触り、使ってみる。「それで初めて机とは何かを理解しますよね。肉体があるから可能なんです。AIにロボットが必要なのはこのためです」と浅田さん。

.....[基本的な]行動原理は「とにかく動く」という単純なものだ。障害物など、センサーから入った情報は直接、避けるなどの動きに結びつける。行動計画を立てるなどの時間がかかる手順は踏まない。

「知能とは、人間が外から詰め込むのではなく、身体と環境の相互作用から現れるようです。...」と松原仁（公立はこだて未来大学教授）はコメントする。

ロボットをいきなり広い世界に放り込んだら、対応できないことが続出、立ち往生するだろう。だが、サッカーは、競技場内の限られた環境、ボールという対象、仲間とのチームワーク、得点という明確な目標など、適度な複雑さがある。...

「環境にほっぽり出したままではだめだし、プログラムを詳しく書きすぎて、過剰に介入しても成長しない。しかし、母親のように見守り育てれば、可能性はあると思います」

と浅田教授は人工知能について希望を語る。限定された状況内での体験が知能を育てるということはそのまま、GDM/BASICのような制限言語内での直接体験が、学習の仕方とかストラテジーをさらにたくみにしていくことに、かさねあわせて見ることができる。

コンピューターに言語を覚えさせることを通じて、赤ちゃんがいかにかとばを覚えるかを探っている須賀哲夫・日本女子大学教授、久野雅樹・電気通信大学助教授らの「赤ちゃんコンピュータ」の紹介もおもしろい。(朝日新聞, 2001年2月3日夕刊)

仮想空間の中に、「赤ちゃん」自身のほかに、時計や箱、本などの物体が配置されている。研究者が「親」となって、キーボードから「わたしはおかさんです」などの会話を入力する。「赤ちゃん」は最初は白紙の状態だが、違う部分と共通する部分を見分ける能力はある。

「赤ちゃん」は「あのはこはきいろです」「このほんはあおいです」といった文章を聞くと、「あ」「この」や「きいろ」「あおい」などの違う部分を比べ、「青い色」を「あおい」と表現することなどを学んでいく。...

...須賀さんは「赤ちゃんの言語獲得のかなりの部分を、この方法で説明できると思う。今までが複雑に考えすぎていたのではないか」という。

わたしたちの言語や認知は「たとえ」の原理のもとづいている、トリチャーズは『修辞学の哲

学』でいった。Metaphor すなわち類似を見るということ、新しい経験のなかに古い要素を見る、異なったシゲキのなかに同じ要素を見る。GDM の新しい teaching point の提示のなかに、生徒は古い要素と新しい要素を見る。たとえば、わたしの大学1年生に EP1 を最初から p.51 まで週2回で半年やった感想にこんなことを書いたひとがいた<sup>5)</sup>：

中学ぐらいの英語だったので全く理解できないわけでもなかったです。... 回数を重ねていくにつれて少しずつ文章は理解に難しかったけど、単語が少しずつ自分の頭に入っていくのがわかりました。次ぎの時間になると、頭に入っていた単語が出てくると、ちょっとは反応するようになりました。(原文のまま)

GDM で学習について自覚的になった生徒は、もっとひろい言語に接しても、どこに注意を向けたらよいか、感じとしてわかっている：どこまでが共通で、どこが変数の部分であるか。わたしたちが発見しながら基礎を教えれば、生徒は学習の仕方を身につけて、あとは自分できりひらいていく。このことはリチャーズたちが Delmar Project で Language For Learning (LFL) の長期的効果についての追跡調査でかなりな数値をあげている<sup>6)</sup>。

以上、GDM/BASIC の限定的世界が新世紀の実験室としてうってつけであることを述べた。

#### 注

1. Konrad Lorenz, *The King Solomon's Ring*. コンラート・ローレンツ『ソロモンの指輪』(日高敏隆訳, 早川書房, 1970), pp. 23-22.
2. 片桐ユズル「GDM の認知的段階づけ」*GDM News Bulletin*, No. 46 (1994).
3. 此枝洋子「言語学習ストラテジーと GDM」*GDM News Bulletin*, No. 51(1999).
4. Ellen J. Langer, *The Power of Mind-ful Learning* (Reading, Massachusetts: Addison-Wesley, 1977), p. 2.
5. 片桐ユズル・吉沢郁生編『GDM 英語教授法の理論と実際』(松柏社, 1999), p. 214.
6. Yuzuru Katagiri and John Constable, eds., *A Semantically Sequenced Way of Teaching English: Selected and Uncollected Writings by I. A. Richards* (山口書店, 1993), pp. 399-361.

---

# 闘い終わり日が暮れて 今日の夕べに明日を夢見る

短大 GDM クラス学生との歩み

此 枝 洋 子

(梅花短期大学)

## 0 はじめに

2000年度、英語コミュニケーションコースの低英語力の学生のためのGDMのクラスを前、後期（一年間）担当した。授業は週2回、各回90分で、合計55回（前期28、後期27）実施した。4月最初のプレースメントテスト成績でクラス分けされた学生を前期21名、後期20名担当した。

学生は「英語を話せるようになりたい」と考えており、英語だけを使うGDMの授業は最初のうちは好評だった。しかし表現が次第に複雑になるにつれ彼らの反応が鈍くなってきた。彼らの反応に注目し、そこから学んだことを書いてみたい。

GDMクラスの授業は概して次のような流れで行われる。

EP音読→ライブで復習→新出事項導入と練習→絵→文字→ライティング  
この中で、

1. 新出事項導入と練習の際の新出事項の確認と推測、
2. 練習の際の反応、
3. 授業で学んだ事柄を学生が実際に使用できるようになるための指導

について考える。

## 1 新出事項の確認と推測 ——その辛い作業から得られる貴重な経験——

毎時間、最初に教科書を読み復習した後、ライブで既習事項から新出事項を導入する。その時、学生自身が（既習事項だけで表現できず）「困ったなあ」と思う経験をし、同時にその解決として新出事項が示されれば学生はその新出事項を比較的抵抗なく学ぶことができる。

「比較的」という表現をここで使ったのは、「新出事項を学ぶ」ことへの抵抗は様々なところから来ていると考えるからである。なぜ抵抗を感じるのか探る必要がある。学生の反応が悪いのは必ずしも教師の新出事項導入のやり方が下手なためではないのだ。最低学力の学生の中には自分が解決方法を考える必要はないと考えている者もあり、この学生たちは「考える」活動に参加しない。教師はこの学生たちの反応に負けずに元気に乗りきりたい。尚、このような学生については3.Aで再び言及する。

新出事項を学ぶ時、学生は初めての表現を見つける。これはLangerの言う“Mindful Learning”の最初のステップだ。新出事項がその状況でどんな意味なのか、どう使われるのかを探るため

に学生は教師の言動に注目する。聞こえる音から表現を確かめる。ある程度見当のつく単語なら「あ、あれだ。OK」となる。時々、クラスの殆どがまだ意味を推測しているうちに比較的英語を知っている学生の一人が「after, 後ってという意味だよ。～」などとやりだすこともある。これは迷惑なので黙らせるようにしている。

時には、全員が全く見当のつかないこともある。すると大変だ。学生たちは筆者に「ね、日本語でどういう意味?」「ちゃんと日本語で説明してよ」「だから授業がわかんなくなるんだ」と叫び出す。sortを導入した時がそうだった。学生たちはsauce?と言って自分の知識と関連付けようとした。No, No. と合図して、他の使用例をいくつも提示する。わからないながらも殆どの学生は考えている。その意味を大体推測できている学生もいたと思う。それでも学生は確信が持てない様子だった。もちろん、「考えるのが面倒だ!」という学生もいた。学生の一人が筆者に綴りを求めた。黒板に語を書くと、その友人が携帯電話で語の意味を調べ、「種類」と日本語で言った。クラス中が「あ、やっぱりね」という表情。こういう状況での携帯電話の登場は望ましくないだろうが、学生たちはある瞬間、一生懸命に自分で「考える」経験をしていた。

推測はしんどい作業だ。特に、考える習慣のない学生にとってはそうだ。彼女たちは、何をしたら「考えた」ことになるのかわからない。なぜなら、今まで彼女たち自身が一生懸命「考え」ても事態は何も変化しないようだったし、自分以外のところで事が進行していたからである。しかし、GDMの授業では英語を使って「考える」ことを経験できていた。しかもLangerのいうmindful learningが経験できているのだ<sup>1)</sup>。最近、日本での「考える」教育の必要が叫ばれているが、GDMクラスでは昔から「考える」教育を提供している。

## 2 学生が新出事項を授業で使用する際の反応

GDMクラスでは教師と学生との関係がうまくいっていなければならない。最低学力の学生の中には大げさかもしれないが教師を恨んでいる者もいる。時間をかけて「害を加えない」「味方である」ことをわかってもらわなければならない。筆者も学年が始まったばかりの4月ごろは学生からの心無い言葉、反応に情けない思いをしたことがあった。が、時間をかけるうちに「本気で関わってくれる先生だ」と筆者を理解してくれる学生が増えた。

学生は目立つことを避ける傾向がある。発話が間違っていたら嫌だと考えて発話しないことはよくある。学生が授業でものを言うのをためらう場合、答えがわかっているにもかかわらず友達関係で目立たぬようにと考えて答えない場合も多い。また、それとは反対に、本当にわからず答えられない場合もある。その場合は目立たないように、カモフラージュしようとする。指名されて答えられず別の人が指名された時、答えられない格好悪さを隠すために「あ、あたしのこと無視してるよ」と大声で叫ぶなどである。

「面倒くさがり」もいる。「なんで私に当てるの?」「わかっているんだから答えなくても良いでしょ」「また私に当てた!(その日初めての指名でもこう言う)」という反応は次第に少なくなるが、それでも一年の最後にもまだある。そういう反応をする学生を様々な手で授業に巻き込んで参加させる。そのような学生でも最終的にwriting testやspeaking testで自分がきちんとできると喜ぶのだ。だから、このような学生は単に「学習の習慣がない」「面倒くさがり」だけだと思っている。「面倒くさがり」でも自分の好きな事には熱意をもって取り組むのだから、今

後、彼女たちとの接点を発見でき有効な接し方がわかれば突破口も見えてくる、と筆者は楽観的に考えるようにしている。

授業中に新出事項をよく理解できず授業後に個人的に指導を受ける学生がいた。彼女は「理解するのに時間がかかる」とスローなのを気にする。毎日の生活でもスローな学生はグズと言われ肩身の狭い思いをする。しかし、新しいことを学ぶのに時間がかかるのは当たり前だ。速いことが良いとは限らない。彼女には「ゆっくりというのは良く考えている証拠よ。悪いことじゃないのよ。」と言い、今日勉強したところを良く復習しておくように薦めた。彼女は非常に良く復習した。後期最後の writing test では彼女の書いた答案は最上答案のうちの一つとなった。

### 3 授業で学んだ事柄を学生が実際に使用できるようになるための指導

GDM のクラスでは毎回授業最初に復習がある。既習事項を復習しそれを基に新出事項を導入する。既習事項はもう使えるようになっており、その時点では新出事項だけに心を留めればよいことになっている。しかし、実際に筆者が授業をした経験では、「前回までの学習事項が使えるようになってきている」というのは非常に大変な事だと思う。もちろん授業で復習の時間を増やすことはできる。しかしそれを充分やっているとほとんど先に進めない。最低クラスの学生の場合、「わかった」と「使える」との間にはかなりの距離があると感じる。こう感じるのは筆者のクラスでの後期の speaking test の経験があるからだ。

後期最後に speaking test を実施した。前期同様、学生は 1, 2 人で、自分で状況を考えて、この授業で学んだ英語表現を使って一人なら 3 分、二人なら 5 分間、行動しながら英語を話すのである。speaking test の後、学生はみな「頑張った」と満足気であった。しかし、筆者は正直言ってがっかりした。なぜならば、後期の新出事項、例えば which, after などは殆ど使われず、前期の学習内容の put, take, give などばかりが使われていたからである。一体後期は何をやったのか！失望しつつ前期と後期の speaking test のビデオを比較した。そこで初めて学生のスピーキング力が伸びていることを発見した。そして教えられた。英語を使えるようになるには英語を使う機会が沢山、そして充分に必要なのだ。今後、彼女らに十分な機会が与えられれば、彼女たちは which, after も自由に使いこなすようになるだろう。

それでは、どのようにしたら多くの十分な機会を彼女たちに提供できるだろうか（後述(B))、さらに、どのようにして彼女たち自身がその機会を作り出し、その機会をうまく生かせる（後述(A)) だろうか。

#### A. 既習事項を使う機会を発見し、利用するために

授業で新出事項を使えるようになるには、授業の後に学生自身がその表現を使う機会を探し出し、それが身に付くまで実際に使え（練習すれ）ばよい。そのような自律した学生を育てたいと筆者は願っている。しかし、担当学生はそのような機会探しや練習を自分がすべきことだとは思っていない。先に述べたように「自分がしなくてもよい（他の人がしてくれる）」とって「考える」ことにも参加しない学生すら多いのだから。

学生自身が自分のすべきことに気付くには何が必要だろうか？ 教師が学生にすべきことを指示すると学生はそれを回避するのに知恵を使うものだ。むしろ学生自身に自分の現状に気付

かせ、解決方法を決めさせ、それに取り組ませようと考えた。自己選択させることで学習の動機も高められると考えたからである。何が自分の目標、問題なのか、その解決の為に何をすべきかを自分で考え試し発見させるため、Listening Diary（資料参照）を学生に書かせた。Listening Diary は毎週提出させ筆者がコメントを添えて指導した。「英語を話せるようになるには習った英語を使う事が大切だ」と学生自身が試行錯誤の中から理解できるよう指導した。Listening Diary では学生の素直な意見が聞け効果があったと考える。

## B. 既習事項を使うのに十分な機会を与えるには

まず、学生が既習事項にどう反応するかを次の段階に分けて考えてみる。

- (1) その新出事項を習ったことがある、と認められる
- (2) ( ) の中に適当な語を入れられる
- (3) 学んだ状況の中でその新出事項を使った表現を再現できる
- (4) 似た状況の中でその表現を再現できる
- (5) 更に広い状況の中でその表現を再現できる

毎回、授業の最後にその日学んだ事項の復習テストをしている。この時、(1)～(3) が試される。これができると学生自身も「今日は頑張った」と満足する。しかし、その学習体験は授業後の学生の態度により、その結果が大きく違ってくる。

GDM では次の授業で復習の時間があるが、授業で学ぶだけで次回まで何もしないとやはり忘れてしまう。種々の学習方法があると思うが、筆者は学生の自律を助ける目的で、担当学生が自分自身の必要に気付き学習方法を探れるような指導をした。学生たちは「英語が話せるようになりたい」と望んでいたので、話せるようになる方法を探そう勧めた。「教科書を読む」を実行した学生が多かったので、筆者は「英語を自分の言葉として使うためには単に教科書を読むだけでなく自分が気付いた事や考えを英語にする必要がある」と説明した。そして、「今の状況で自分が気付いた事を英語で言う」活動を勧めた。以前に新井さんや松浦さんから聞いたアイデアである。「英語をつぶやくように言うと良い、また友達同志でも練習できる」と実行を勧めた。

Listening Diary の記述によると、学生の殆どが「つぶやき練習」を短時間であれども実行したようだ。その中で、スローなのを気にしていた前述学生は非常に真面目に練習を続けた。彼女は台所でも「ジャガイモをむいてゆでる」の類の行動を一つずつ英語で言いながらやっていたと言う。彼女は授業中に新出事項を理解するのは一番遅かったが必ず復習をしていた。そして学習内容を着実に身に付け、最後の speaking test で前期とは比べられないほどの確信を持って英語を使ってみせてくれた。

「つぶやき練習」以外にも既習事項を身につけるのに有効な方法があると思う。例えばリーディング教材を豊富に提供できれば学生自身が選択し楽しみながら英語の力をつけてゆくことができると思う。GDM の grading に合わせて教材が提供できれば既習事項の定着に大きく貢献し、自発的な学習を促し、学習者の自律を助けると確信する。今年度、GDM の吉沢さん、佐藤さんに尋ね教材を頂き、筆者自身も Happy Reading, First Steps in Reading English, EP book 1 の workbook 等を利用して教材を作り、投げ込みでリーディング教材を提供した。「希望者の

み。やった人は力がつくよ」と励ました。7割の学生が取り組んだ。内容的には改善すべき点ばかりで、この紙面で紹介できる程のものではない。来年度以降の課題だと思う。しかし、リーディングについてはあまりに大きな仕事であり、正直言って私が取り組んでどれだけできるか全く自信のない状態である。

#### 4 今後の課題

筆者自身の現在の最大の関心事は学習者の自律である。一人一人の学習者が授業で核的なものを学び、それを自分のものにして日々の生活の中で生かしてゆけるように手助けしたいと願っている。短大へ入学した低学力学生も GDM の授業で自分の言葉を得て元気になってゆく。学生のような変化を見ることができるとは幸せである。その過程で“mindful learning”の方法が暗に学ばれているのも素晴らしい。彼女たちが「自分もできる」とわかった時、自発的に更なる挑戦ができるように今後は適当なリーディング教材の提供に取り組みたいと考えている。今日の日が暮れたが、また明日の陽が昇る。明日という新しい一日を学生と共に闘いつつ過ごさせてもらおうと思っている。

<sup>注1</sup> 此枝洋子「Mindful Learning がしたい 1」「勉強（仕事）は楽しくないものか?」「暗記について」「正しい答えは一つか」GDM 英語教授法研究会西日本支部ニュース 2001 年 3～6 月。

#### 参考文献

- Richards, I.A. & Gibson, C. *English Through Pictures* Book 1. Yohan.
- Crabbe, D. 1993. Fostering Autonomy from within the Classroom: the Teacher's Responsibility. *System*. 21/4. pp. 443-452.
- 片桐ユズル、吉沢郁生編 1999 『GDM 英語教授法の理論と実際』松柏社
- 此枝洋子 1999 「言語学習ストラテジーと GDM」*News Bulletin*. 51.
- 2000 「短大生に GDM で基礎から英語を教えて」*News Bulletin*. 52
- Langer, E.J. 1997. *The Power of Mindful Learning*. Reading, Mass.: Perseus Books.

資料 : Listening Diary

Listening Workshop, Communication in Context に関連して自分でやってみようと思うこと

学生番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

- 1 自分の弱いところ、問題だと思うところ
  
- 2 1について どうなったら良いと思いますか？
  
- 3 どうやってそれを実現しますか？（具体的な方法）

今週の予定

日（曜）	やることは？	どんな結果でしたか？

一週間やった後の感想：

今週やったことが問題点の解決につながっていたと思いますか？

（つながっていた、つながっていなかった）と思う。

その他の感想、来週の方針など：

---

# 高校における GDM を、生徒はどう見ているか？

〈アンケートから〉

中山 滋 樹

(東京都立久留米西高等学校)

## 1. 授業の環境

高等学校では、Oral Communication という授業があります。現在の勤務校では、一年生に週二回、生徒は 20 人の小グループにしています。そのうち一回はニュージーランド人講師と日本人専任教師とのチーム・ティーチングで英語劇、そして、もう一回が、GDM 教材による英語授業という振り分けで、一年間を過ごしました。

学年は 40 人×6 クラスで、それを 20 人ずつの 12 グループに分けていますので、3 人の教員で 12 を分割して受け持っていました。これは、「ひとりの教員が GDM でやりたいと思ったからといって、やれるわけではない」という状況を意味します。しかしながら、幸い、理解を得られて、他の 2 人にも、教材は私が作る GDM の教材を使ってもらい、すなわち、Grading をそのままやってもらうことができました。毎回、私自身の授業プランを書いてお渡しして、それを参考にしてもらったりもしていました。

そのような経過で生徒たち全員が、GDM の教材をその順序で一年間、週に一回の授業を受けました。夏休みの後などに復習を入れたりしたので、先へ進んだのは 18 回であり、over / under, before / after まで学習しました。その後の期末考査中に、全生徒にアンケートを書いてもらい、集計したものが今回の資料です。12 グループ中 6、つまり半数が私の授業を、もう半数は他のふたりの教員が 3 グループずつ受け持っていました。区別無くすべて一緒に数えました。

## 2. 授業についての、アンケート集計

生徒の側からは、この一年がどうであったのかを調べてみました。質問は、以下のものでした。

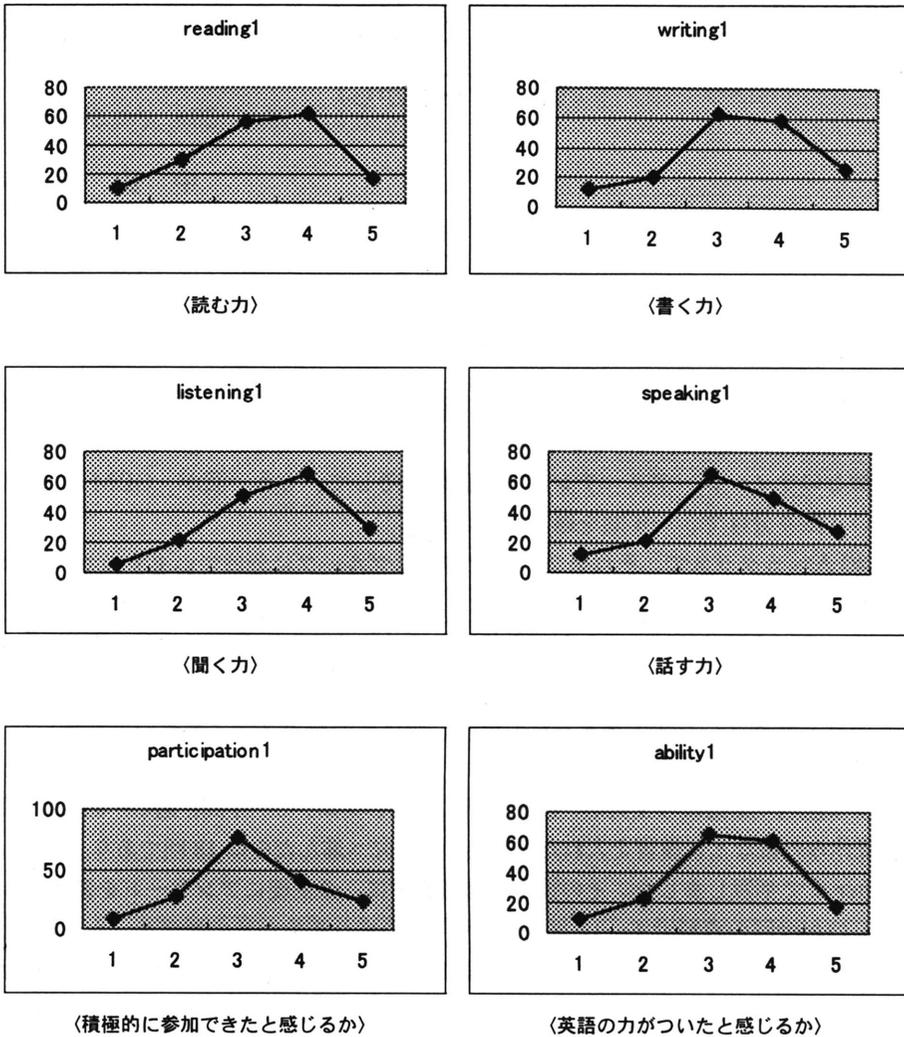
〈アンケート〉

205 教室での授業に関して (L.L. の授業は除く) 来年以降の参考に、質問します。英語の能力を身につけることに関して、授業が役に立ったでしょうか。

一年前と比べて、英語を読む力、書く力、聞く力、話す力について、それぞれ解答用紙の数字に○をつけてください。

1. 「役に立たなかった」
2. 「少ししか役に立たなかった」
3. 「どちらとも言えない」
4. 「少し役に立った」
5. 「役に立った」

表：アンケート集計結果



また、

- ・自分が授業に積極的に参加できたかどうか、
- ・205 教室での授業を通して一年前より全体的に英語の力がついたと感じているかこのふたつについても、○をつけてください。

表は、「読む力」「書く力」「聞く力」「話す力」そして「積極的に参加できたと感じるか」「英語の力がついたと感じるか」以上の6項目についての、生徒の返事です。

どう解釈するかは、いろいろあるのですが、個人的におもしろいと思った点が、いくつかあります。特に、

- ・reading の力がついたと感じている。
- ・speaking の力は、それほどでもない。

これは、逆の返事を予想していました。授業では、物語を読むような勉強をできなかったこ

と、毎授業、英語で言う練習を繰り返していたことから、そのような答えが出ると思っていました。listening で評価 '4' が最大値というのも予想外でした。聞きとりを練習させようという意識はあまり持っていませんでした。ただ、授業冒頭に発音練習を入れていたことが影響したかもしれません。

writing については、ほぼ期待通りでした。

参加の意識については、どっちつかず、の結果になりました。総合的な英語力については、ほぼ writing と同じ形になっています。最初に、“I” “You” という初歩的なところから始まったことに驚いていたものの、一年後には、「学んだ」という実感を持ってくれているようだ、と受け取っています。

生徒自身の印象は、このようなものでした。

教えている側の考え・予想・期待とは、必ずしも一致しない様子も見えて、興味深い結果でした。

### 3. 文法教材としての、GDM プリント

一回の授業には、毎回、「授業プリント」と「宿題プリント」を一枚ずつ作りました。大きさは B4 判で、だいたいのは表裏印刷していました。

(個人のホームページ <http://blahblah.hoops.ne.jp/> で、プリントを公開しています)

今回のアンケートでは、上記の数字によるものと同時に、印象を文でも書いてもらいました。数値でも文でも、どの教員が受け持っていたかにかかわらずおおむね好意的に、英語力を得られたとして受け入れられていました。このことから、GDM 教材は、文法の教材集として自立したものになれるのではないかと考えています。すなわち、GDM 教師でなくても、それを使うことで、かなり効果的に生徒に英語力を身につけさせることができるし、生徒たちも喜んで・楽しんで学べる、ということです。もちろん、GDM の理論を学び、その技法を用いて教える方がいいのですが、最初からそれをすべての教員に要求するのも、難しいように感じます。広く利用されることの意義と可能性とを含む調査結果のように思えます。

## GDMビデオ全リスト

前号で報告した予定どおり、手持ちのビデオ教材のデジタル化をほぼ完了し、下記のように整理して、あつかいやすくなりました。これら英語のテレビ教材には、つねに forward-looking であったリチャーズの思いがこめられています。研究・教育目的のために特別に Language Research, Inc. から許可をもらっています。

**English Through Video:** EP1, 4-51 の絵に音声をつけた最もスタンダードな AV 教材。

**English Through Television Series:** EP1 の後半にもとづきながら、単語と文型をいくらかふくませ、アメリカの日常生活を描いている。各レッスンは A, B, C の3部分に分かれ、A は sound のみによる導入、B は音声のあとのリピートのときに caption があらわれ、C はテスト用で絵が先にあらわれ caption/sound があとに来る (全3巻)。

Video 1: Lessons 13-17 (EP1, 58-81)

Video 2: Lessons 18-21 (EP1, 82-100)

Video 3: Lessons 22-23 (EP1, 101-112)

**Spanish Through Television:** Spanish Through Pictures, Book 1, 1-40. Cartoons.

アニメ版はじめてのにほんご: 『はじめてのにほんご (JP1)』 1-51 ページの cartoons.

ビデオはじめてのにほんご: アニメと音声による導入からはじめ、ライブと書き順と読み方練習を組み合わせた画期的な日本語 AV 教材 (全4巻)。

その 1: ステップ 1-3 (JP1, 3-12)

その 2: ステップ 4-6 (JP1, 13-19)

その 3: ステップ 7-9 (JP1, 20-30)

その 4: ステップ 10-11 (JP1, 31-36)

(片桐ユズル)

価格はすべて 1 巻 3000 円 (送料サービス)

〈注文先〉 片桐 ユズル

〒 603-8035 京都市北区上賀茂朝露ヶ原町 16

フォルム上賀茂 202

TEL/FAX: 075-712-1951

E-mail: yuzuru@kyoto-seika.ac.jp

〈送金先〉 振替 01000-3-12379 「片桐ユズル研究室」

## 活動の記録

(1999年9月～2000年7月)

### <GDM セミナー等>

夏期セミナー (8/17-8/20)	YMCA 東山荘 (御殿場)
中級セミナー (11/14)	豊島区立勤労福祉会館 (東京)
中級セミナー (3/25-3/26)	愛知県青年会館
初級セミナー (1/8-1/9)	三田福祉会館 (東京)
英語発音ワークショップ (5/13-5/14)	川崎青少年の家 (川崎)

### <公開講演会>

東日本支部 (6/10)	すみだ産業会館
講演 「言葉を学ぶ不思議と楽しさ」	近藤ゆう子
授業実演	山田 初裕
参加授業	箕田兵衛 / 中山滋樹 / 猪俣徳枝
西日本支部 (6/18) 「GDM 教育セミナー」	大阪国際交流センター
講演 『「その場で自己表現ができる」とはどういうことか』	片桐ユズル
授業研究 「授業で困ったことの解決策— 中学校英語と GDM」	松浦 克己
(プレゼンテーション) 「文型指導から自己表現活動へ」	楽しい授業作りの3つのポイント
	吉沢 郁生

### <月例会等>

#### 東日本支部

9/18	月例会	三田福祉会館	
	デモ	EP2. p.19	唐木田照代
	トーク	「授業が成り立たないと嘆く前に」	吉沢 郁生

10/9	月例会	神楽坂エミール	
	デモ	EP2. pp.2-3	竹内 久枝
	トーク	「場面をふまえたイントネーション」	伊達 民和
11/14	月例会	豊島区立勤労福祉会館	
	デモ	"let"	村田 晴子
	トーク	「日本語を母語としない生徒たちから見えるもの」	井草まさ子
12/11	月例会	渋谷区立新橋市民会館	
	デモ	"will give/giving/gave"	多羅 深雪
	トーク	「Story-Telling を楽しむ」	近藤ゆう子
1/22	月例会	神奈川県民センター	
	デモ	How long/much ... ?	加藤 准子
	トーク	「どんな英語を教えるかー コミュニケーションのためのカリキュラムを考える」	安西 聖雄
2/5	月例会	三田福祉会館	
	デモ	"Under, Over, Part"	新井 等
	トーク	"Some Examples in BASIC Specially Good for My Use"	牧 雅夫
3/5	月例会	すみだ産業会館	
	デモ	"Who (rel.)"	植田 恵子
	トーク	"Kiko in GDM"	箕田 兵衛
4/22	月例会	神奈川県民センター	
	デモ	不定詞	黒瀬 るみ
	トーク	「教育思想と語学教育ー GDM 教師がシュタイナースクールを覗くと」	中山 滋樹
5/20	月例会	目黒区立目黒住区センター	
	デモ	"Which (rel.)"	菅生由紀子
	デモ	「あの棚にある服をみせてください (日本語)」	小川 和子
7/15	月例会	目黒区立田道住区センター	
	デモ	Be 動詞を含む疑問文	伴野 温子

## 西日本支部

- 9/19 月例会 京都市北文化会館  
デ モ "Of" 江本 浩二  
読書会 後藤寛『850 語で考える世界』
- 10/31 月例会 大阪市立弁天町市民学習センター  
デ モ "Go" 麻田 暁枝  
読書会 後藤寛『850 語で考える世界』
- 11/27 月例会 梅花短期大学  
デ モ "Yes-No Question" 松川 和子  
読書会 後藤寛『道具としてのベーシック英語教本』
- 12/12 『GDM 英語教授法の理論と実際』出版記念会  
大阪市立弁天町市民学習センター  
シンポジウム  
「『GDM 英語教授法の理論と実際』が切り開いた世界」  
(パネリスト) 森脇建夫, 梅本裕, 吉沢郁生
- 1/30 月例会 大阪市立弁天町市民学習センター  
デ モ "What ... ?" 此枝 洋子  
読書会 後藤寛『道具としてのベーシック英語教本』
- 2/19 月例会 京都市北文化会館  
デ モ "Will be" 麻田 暁枝  
読書会 後藤寛『道具としてのベーシック英語教本』
- 3/26 月例会 愛知県青年会館  
デ モ "Make" 菅生由紀子  
トーク 「基本動詞の豊かな働きと GDM」  
相沢 佳子
- 4/16 月例会 大阪市立弁天町市民学習センター  
デ モ "With, Together" 此枝 洋子  
読書会 後藤寛『道具としてのベーシック英語教本』
- 5/21 月例会 大阪市立弁天町市民学習センター  
デ モ "Over, under, Between" 此枝 洋子  
読書会 後藤寛『道具としてのベーシック英語教本』

7/15 月例会

大阪市立弁天町市民学習センター

デモ  
読書会

"Have"  
後藤寛『道具としてのベーシック英語教本』

麻田 暁枝

News Bulletin No. 53 (June, 2001)

発行 GDM 英語教授法研究会

東日本支部 〒262-0017 千葉市花見川区朝日ヶ丘3301  
にれの木台3-22-502

岩淵千津子方 TEL 043-274-0885

西日本支部 〒567-8578 茨木市宿久庄 2-19-5

梅花短期大学 英語コミュニケーション学科  
此枝洋子研究室内 TEL 0726-43-6221

編集委員 磯野 秀仁

佐藤 正人

制作 青磁書房 (東京)

印刷 東京カラー印刷 (株)